



信友会会報

2012年2月

<<1月例会より>>

信友会1月例会は、中野実先生を迎え、「聖書翻訳について」の題でご講演いただきました。新共同訳聖書が刊行されて20年経過する時をむかえ、日本聖書協会は、2016年の刊行を目指して聖書翻訳に取りかかっています。この聖書翻訳の基本方針や抱えている諸問題について語っていただきました。

信友会 1 月 例会

「聖書翻訳について」

中野 実先生

久しぶりで信友会で話をするようになったが、課題は自由に選べとのことなので「聖書翻訳」を取り上げることにした。大宮溥理事長は所用で出席できなかったが、出ていれば面白い話になったと思う。

日本聖書協会は、新共同訳聖書の発行から20年以上経過した昨年からは、新しい聖書を刊行することとし、聖書翻訳プロジェクトを立ち上げている。私もその責任の一端を担っているので、その中で感じていることを話し、皆さんからも新しい聖書への期待や注文をお聞きしたい。

日本聖書協会の聖書翻訳の方針

『新共同訳』刊行から20年経過している。その後の聖書学などの発展、日本語や社会構造の変化から『新共同訳』の見直しの要請が高まっていることから新しい聖書の翻訳の必要性がある。翻訳にあたっては、次の7点に留意することが掲げられた。

- ① 新しい翻訳は、日本の教会の標準的聖書になること、すべての教会で使用されることを目指す。
- ② 礼拝での使用が主要な目的であるので、朗読に相応しく、格調高い日本語でなければならない。
- ③ 聖書を読む対象は、義務教育を終了した日本語能力を持った人々であること。
- ④ 将来に渡って日本語や日本文化の形成に貢献できること。
- ⑤ 翻訳にあたっては、原典に忠実であること。
- ⑥ 聖書が神の言葉であることをわきまえて、統一性を保つ視点を失わないこと。
- ⑦ 注、引照聖句、重要語句の解説などで読者のニーズに応えること。

難しい注文が付けられて困惑している。特に⑤番は、原典と日本語を両立させることは難しい。なお、新共同訳聖書には、注釈が無いので今回これを付けることは良いことであろう。

日本聖書協会では、新翻訳の聖書の名称を、未だ決っていないが『標準訳』するようである。出版目標は2016年としている。

現代社会の標準となる翻訳とは何か。標準としての翻訳とは何かを考えると頭を抱える。



新共同訳の翻訳には20年を要しており、現代のコンピュータ、インターネットの時代で、毎回一同に会して会議をしなくて済む時代であるといっても、2016年の刊行は無理であろう。

第二次世界大戦後の聖書翻訳

戦後最初の翻訳されたのは、プロテスタント派では、1955年の「口語訳聖書」である。続いて、1970年に発行した、いわゆる「福音派」による翻訳の「新改訳聖書」である。

カトリック派では、1957年の「バルバロ訳聖書」があり、続いてフランシスコ会派による聖書が、1958年から翻訳を開始し、1979年に新約聖書が、2002年に旧約聖書が完成し、2011年に合本刊行されている。

共同訳聖書の発行については、カトリックにおける第2次バチカン公会議以来の動きが影響をもった。これを契機に、1960年代後半から、カトリック、聖公会、プロテスタントが共同して聖書を翻訳するプロジェクトが開始された。まず、1978年に動的等価理論という翻訳理論に基づく『共同訳新約聖書』が出版された。この中では、例えば主の祈りで、「御国を来たらせたまえ」を「あなたの支配を行き渡らせてください」。「信仰によって義とされる」は「信じることによって神のみ前に正しいとされる」となった。この訳は特に教会からの評判が極めて悪いため方針を変更する事になった。

1987年に新約・旧約そろった形で『新共同訳聖書』が完成、刊行された。この聖書は、初めての共同訳であり、人的にも、資金的にも日本人による聖書翻訳となった。しかし、これには、いわゆる福音派の多くは加わっておらず、彼らは『新改訳聖書』（日本聖書刊行会、初版1970年）を用い、現在は2004年発行の第3版を用いている。

個人訳、委員会訳などの聖書としては、有名な旧約学者の関根正雄訳の『旧約聖書』、無教会派の塚本虎二訳の『新約聖書』や内村鑑三の愛弟子の前田護郎訳の『新約聖書』がある。また、いのちのことば社の『リビングバイブル』も発行されている。

新しく、しかも学術的な聖書として、岩波書店から発行された、旧約聖書、新約聖書翻訳委員会訳（いわゆる『岩波訳』）があり、田川建三訳の『新約聖書』も出されようとしている。

今、新しい聖書翻訳を試みる意義と問題点

日本聖書協会は、『新共同訳聖書』刊行から20年を控えて、社会の様々な変化、現在の聖書に内在する問題点、特に日本語の問題をどのように解決するかを考えて、そろそろ改訂、あるいは新しい翻訳を考えたようである。しかし、新しい翻訳を作ろうという心意気が今の教会にあるだろうか。各教派にこれに関わる意識があるかに疑問を持つ。日本キリスト教団はどうか、翻訳に関わる教団推薦の翻訳者を熟慮の上派遣しているか。現在、聖書翻訳のための人材は十分に備えられているかについても問題が多い。

新しい「標準訳聖書」の翻訳が難しければ、「新共同訳」の改訂でゆけばとも考えられるが、いろいろな問題があるようで、日本聖書協会はとにかく今回新しい翻訳に取り組むことにしたようである。

これに関連して、新共同訳聖書刊行以前に、その翻訳の中心的な役割を担った左近淑先生が阿佐ヶ谷教会信友会で話された文章があるので紹介する。

「しかし、わたしが今心から感じているのはもっともっと深刻なことである。日本の教会はまだ旧約聖書を翻訳する真の実力はないのではないかということである。この数十年、聖書研究、聖書学の水準は上がり、外国で学位を取り、外国人に伍して学術的発表をするようになったことは確かである。しかし、旧約聖書39巻について一冊一冊のテキストの綿密で地味な研究はできていない。まだ頼りになる研究が全く手につけていない書物もかなりある。それでどうして翻訳ができるのか。今、共同訳の旧約の翻訳に関わっている人は二十人ほどいる。しかし、言語であるヘブライ語の文を紙背に徹して読みうる人は少ないということは最近いやというほど知らされている。さらに、私自身を含めて言語で読んだものを、聖書に殆んど興味を示さない一般の人々まで引き込むような日本語に書き表せる人はひと握りもないかもしれない」（阿佐ヶ谷教会信友会報1982年3月号、『左近淑著作集第5巻』教文館 1993年、350・51頁）

この左近先生の文章を読んで、このときから20年経た現在の状況は、「今はもっとましになったか」、「新約は大丈夫か」、「ますます悪くなったか」と自問自答する。深刻な問題として、各教派は本当に翻訳をやろうという意気込みがあるのかどうか。翻訳の難しさを克服する気概があるのかどうかである。

翻訳のジレンマ

翻訳の準備をするにあたって感じていることの一つは、原典に忠実であることと、日本語として優れていることがなかなか両立しないということである。また、共同訳の難しさを感じはじめている。

会の冒頭に読んでいただいた、ヘブライ人への手紙 1章 1~4節をできるだけ直訳すると次のようになる。「1:1かつて神は、多くの部分から成り、また様々な仕方で(1)、預言者たちにおいて父祖たちに語ったが、1:2 aこれらの日々の終わり(2)においては、子である方において私たちに語った。1:2b彼は彼を(3)万物の相続者として立て、彼を通して世界(4)を創造もされた。1:3a彼は彼の(5)栄光の反射(6)及び本質の刻印(7)であり、1:3b彼の力の言葉(8)によって万物を担いながら、1:3cもろもろの罪のきよめを行った後、1:3d高い所にいる主権者の右に座された。1:4彼は、天使たちよりもまさる名を相続しているのと同じだけ、天使たちより優れた者になった。」

この箇所が他の日本語訳聖書ではどのように翻訳しているか。口語訳、新改訳、岩波訳、文語訳などの聖書で



比較するとそれぞれの立場から表現に工夫が見られる。

直訳ではごつごつとした堅い食べ物のように理解すること、美しい日本語とはほど遠いものである。それぞれに注をつけると次のようになるであろう。(1)「多くの部分から成り、また様々な仕方では、預言者たちによって多くの機会に語られた命令、警告、託宣、物語など。「様々な仕方では、たとえば、天使、夢、幻、静かな小さな声で語られた。」

(2)「これらの日々の終わり」は、「これらの日々」とは現在のことか? 「今の時の終わりにおいて」という意味? それとも昔から現在まで続く救済の歴史の終わり? それとも「この終わり時」と訳すか?

(3)「彼は彼を」では、最初の彼は神で、二番目の彼は「子である方」になる。

(4)「世界」はアイオーン。しかもこれは複数形。「時代」あるいは「世代」という訳もありうる?

(5)「彼は彼の」は、最初のかれは、「子である方」で二番目は、「神の」になる。

(6)「反射」? 能動的な「反射」か、それとも受動的な「反映」か? 御子イエスは「光からの光」!

古代の教父の言葉

(7)「刻印」はカラクテールというギリシャ語で、判子、スタンプに刻まれた印。神と御子の関係を表わすたとえ。

(8)「彼の」は、神それとも御子イエス? 「力の言葉」は「力ある言葉」

このように、今回の翻訳では「注」を付けることになるが、原点に忠実に訳することの難しさがある。

翻訳上の問題、課題

新共同訳聖書の翻訳では、カトリックとプロテスタントで、かなりの表現の違いを妥協しながら翻訳していた。

「子である方」そしてこれを受ける関係代名詞「彼」をどう訳すか。「御子」か、「御子」をどう読むか。「みこ」か「おんこ」かが大きな問題になる。

特に、「御霊」をカトリックが反対し、新共同訳では、聖霊は良いが、「御霊」は、「霊」とした。この訳に対し「御霊の働き」を重視するホーリネス派の教会は、強い反発を持っていた。今回は、ホーリネス派から「みたま」の復活について強い要望がある。カトリックは反対するであろう。

このように、聖書翻訳には沢山の問題がある。日本聖書協会が目標にする、「格調高い日本語」と「原典に忠実な翻訳」の両立は多くの困難がある。

翻訳者の氏名は、後ほど公開されるようである。聖書学者のみでなく、国語学者もそろえて慎重に翻訳にあたるべきであろう。

(文責:玉澤武之)

.....